

「開放」とは読んで字のごとく「開け放つ」の熟語です。住宅の設計を依頼される時の要望で、よく出るワードの一つです。言葉のニュアンスから、向こう側に向かって解き放たれるような感じがします。住空間にそのようなニーズがあるという事は、多くの場合、閉鎖的な環境での暮らしがベースにあるものと推測できます。

まさにそこからの開放なのかと・・・尾崎豊の歌詞みたいですね。では住空間での「開放」というのは具体的にどのような事なのか、また、我々がどのようにその課題に向き合い解決しているのかを述べたいと思います。

一昔前の日本の住宅の間取りは、廊下を隔てて「茶の間」「台所」と、部屋ごとに仕切られていました。しかし、年に数度、お盆や正月等で親戚や近所の人を招いて宴会をする際は、ふすま戸を開閉したり外したりすることでサイズを変えられる「通し間」の座敷があり、「開放する」という事は特別な事であったと言えます。開放性にいい印象を持っているのはそういう事も含まれていると思います。

しかし、普段から開放的に暮らす事だっただけではずなのに、どうしてふすまで仕切ってしまったのでしょうか？そこには開放的に暮らす事の難しさも伺えます。それは現代の住まいのあり方にも繋がっているのです。

昔の家は「大きな家に小さく暮らす」という印象を持ちます。それは前述した通り、普段はふすま戸で仕切らざるを得ない状況であったからです。

その理由の一つは居心地です。床に座る生活の中で、必要以上の家具が配置される事がない上に、人が居ない時にも座敷を開放している、なんだか不気味で落ち着かないという感覚になります。特に夜間の生活に欠かせない明かりは、その全ての空間を照らすには不経済です。かと言って、自分のいる場所だけ照明をつけて他はつけられないというソリューションは不気味さしか残りません。笑

これに関しては現在主流になっているLDKのワンルーム空間でも同様の事が言えます。広すぎるのは不気味で、かえって居心地の悪いものです。

夜、明かりのついてない吹き抜けの方から視線を感じるとか・・・
(こわっ！)

開放的な暮らし。

zuiun便り vol.47

そして、昔と今の家づくりの決定的な違いは住宅の断熱性能です。これは、住宅の開放性に大きな変化をもたらしてくれました。住宅の断熱性能が上がる事によって、少しの熱源で効率よく部屋が温まります。昔は、トイレに行くのに茶の間の戸を開け放しにすると、「ちゃんと戸を閉めなさい！」と怒られたものです。しかし、今はその逆です。「熱くなったから戸を開けといて。」

そうです。今の家は戸を開ける事ができるのです。

温度環境が昔と全く違うという事は住宅を設計する方法も大きく変わったとも言えます。廊下も部屋も一緒になった無駄なスペースの無い開放的な住宅です。まさに、「小さい家に大きく暮らす」のが現代の住宅なのです。

例えば、住宅密集地のような環境でもLDKを二階に設けて近隣を気にせず採光を得ることができます。二階に上がる事で開放的な開口(窓)が配置しやすくなるのです。そして、近隣の建物の影の影響を受けにくいという利点もあります。その窓から広い空が望めれば、さらに視覚的にも開放性が増します。

また、スキップフロアのような中二階のある計画では中二階を通して、一階と二階を緩やかにつなぐ事で、内部の開放性をつくる事ができます。最近の我々が設計した住宅では、あえて平面をフラットにせず起伏を設け、縦方向の空間構成を考えた住宅を作ることが多くなってきました。つまり、二階に行くまでの間に仕切りの無い、家全体が一室空間のような住宅です。少し前までは、感覚的に設計する事を躊躇するようなプランです。今までは、平面プランのみで家の間取りの良し悪しを評価していた状況から、断面プランも含めくめた提案まで評価しないと、本当に開放的に設計されているかどうかを判断する事ができないくらい、住宅設計の可能性が膨らみましたし、それは、土地選びにも影響するくらいのパラダイムシフトだと思っています。

住宅の断熱性能はそういう意味でもとても重要な事。寒さ暑さからの開放こそ、「大きく小さく暮らす」からの開放であり、「小さく大きく暮らす」への鍵なのです。

今回の内覧会もただ「開放」されているのか、確かめにお越し下さい。